

---

# 蒼島一家の物語

らいち 2

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蒼島一家の物語

### 【Zコード】

N1018Y

### 【作者名】

らいち2

### 【あらすじ】

（これは前作なんでも屋の日常～面倒事編～の続編です。もし、見ていない人は見ておくことをおすすめします。）なんでも屋を経営している蒼島竜輝とその家族。その家族はほかとは違った一面を持っていた。これは、そんな蒼島家の日常を描いた物語である。

## すべては「」から始まる

さわやかな風、新鮮な空気、晴れ晴れとした空。

まさに、いいことが起きても不思議ではない天気だ。実際、俺も今朝から「」ことが起きないかと期待していた。

だが、運命は俺のことが嫌いなのだろうか。いや、間違いなく嫌いなのだろう。でなければ、こんなことになるわけがないのだから。

「…………と言つわけで、今日からよろしくねお兄ちゃん」

「僕の「」もよろしくね竜輝お兄ちゃん」

もし、この場になんの事情も知らない者がいたら即俺の「」とを異端審問会にかけてしまうほどの美女が俺の目の前に2人いる。いや、正確には美女と男の娘がいると言つたほうがいいのだろう。

そんな2人と俺の関係はなにかと言えば、血のつながつた兄弟と言えばいいだろう。そして、2人は双子だ。そのせいか、弟のほうも姉と同じ容姿をしており、実際に女と間違えてもしようがないほど

になつてゐる。

ただ、この2人問題がある。そのせいでも、誰とも付き合つたことがないどころか、見向きもしないほどである。最近になつて、少しだけだが他の男性と話をするようになつてきたので、少し安心してきていたりする。

その2人が抱えている問題。それは、ブラコンだ。それも重度のだ。さらに悪いのはその対象が俺だつていうことだ。どうせなら、弟の姫花のほうにすればいいのに思つていた時期もあつた。ただそれだと、姫花の対象が俺に確定してしまつのでそんな考えはすぐに捨てたが。

では、どのくらいこのものかと言えば、先ほども言つた通り他の男性を見向きもしないほどだ。たまに、意識を向ける時もあるが、その時に言つことは決まって「あなたの存在はありません。」みたいのことを平然と言つてしまつ。

そして、何よりやつかいなのはヤンデレ持ちと言つことだ。まあ、これは容易に想像できた者もいるかもしだれど、何より厄介なのはその向ける対象だ。何故か俺と親しい男性に向けるのだ。ああ、ちなみに向けているのは殺氣とかの悪い方な。

なぜ、女性に向けないのか竜姫に一度聞いたことがある。そしたら、「お兄ちゃんは魅力があるからね。だから、他の女性と付き合うの

は別に構わないと思つていいからね。」と言われた。

俺としてはなぜそんな思考になるのか知りたいんだが。何をどうやつたらそんな考えに達するのだろうか。そう考えたりもしたが、俺が理解できるわけがない。なので、そういうものだと納得していたちなみに、姫花にも同じことを聞いたが同じような答えが返つてきた。いや、お前がそんなこと言つてどうすんだ。仮にも、お前男なんだが。

まあ2人の説明はこんなところだな。何？前作でも聞いたことがあるつて？細けえことは気にするなよ！

さて、現状を改めて確認しよう。まず、なぜこうなったのか順を追つて整理してみる。最初は2人が俺の家を訪れた。その後、話があると言つてきたので、居間まで誘導しそこで話を聞くことにした。そして、話を聞いているうちに2人が俺の家に住むことが分かつた。

だいだい大きくまとめるところだ。うん、どうしてこんなことになつたのかよくわからない。ただ、このままだといろんな意味でまずい。主に、俺の人生的な意味で。

「なので、俺は断固拒否するわけだ。だから、帰つてくれないか。」

「そんなことが聞き入られると思つていいのお兄ちゃん？」

「例えお兄ちゃんに拒否されても僕とお姉ちゃんは勝手に屈座るけどね。」

「テスヨネ。」

大方予想していたことだけど、流石にこの的確に言われるとそれはそれで結構傷つくな。

「それにしても、よく親父が許可をとってくれたな。」

「それはね、お父さんとお兄ちゃんへの思いを包み隠さず話したら、『それなら引き止めることもないな。無事に暮らして、子供を作るだぞ!』って許可してくれたんだ。」

「うん、今度親父にあつたら真っ先に殺そつかな。有無を言わさず」  
「に。」

しかも、子供を作るつて発言しているんだあの親父。確かに、この世界では一応認められているけど、はっきり言ってあまりいいものではないぞ。主に、俺の人生的考え方として。ていうか、俺にはすでに子供も妻もいるのを知っているだろあの親父は。間違いなく、それを承知の上で許可を出したな。

…………一生苦しみを重ね続けるよ  
うにしようかな。

ああ、そういうやひとつ言い忘れてた。わつか龍姫はお父さんと言つていたが、あくまで自分の父と言うことは認めているが、男性としては認めていない。まあ、親父はそんなこと別に気にしていないけどな。

まあ、そんなこんなで結局2人が俺の家に住むことが決まつていたとこ。うわけだ。はつきり言つてありがたくない。

さて、俺はいつまで無事でいられるのか。それはこの先の物語を見ていくばわかると思う。

そして、ここから俺、蒼島竜輝のさうに増した前途多難な生活が幕を開いたのだった。

できれば、嫌なことが起きませんよ。この時、そう願っていた俺であった。

## 人物紹介1

蒼島 竜輝（そうじま りゅうき）男

主人公。なんでも屋を経営し、妻の紅花と娘の竜花の3人で生活をしている。性格は、めんどくさがりやで、少しいい加減。しかし、やるときはちゃんとやる。他人の不幸や他人を傷つけることを喜ぶ一面を持っているが、根本的にはいい人。本人は自覚はないが顔はイケてる方。少し前までは、Bし疑惑が悩みの種だった。最近の悩みは妹と弟が家に居候してきたこと。

蒼島 紅花（そうじま こうか）女

竜輝の妻。夫の竜輝とは幼馴染であった。昔は竜輝にトラブルメーカーと呼ばれるほど騒ぎの中心的存在みたいなものであったが、結婚してからはおとなしくなった。周りからは人柄がよくなつたとの評判。竜輝のことをよく知つており、彼が重婚してもよいと思つている。そのため、竜姫や姫花の入居を認めている。旧姓は赤夜。

蒼島 竜花（そうじま りゅうか）女

竜輝と紅花の娘。人懐っこく、物わかりがよい。そのためか、一部の者には少し苦手意識を持たれています。竜姫と姫花が一緒に生活することには認めている模様。ちなみに、年齢は10歳。

蒼島 竜姫（そうじま りゅうじ） 女

竜輝の妹であり、姫花の双子の姉である。兄のことが大好きであり、既成事実を作りたいほど。兄以外の男性を認めておらず、存在がないものだと思っている。だが、最近少しだが、改善されてはいる。弟の姫花と一緒に竜輝の家にやってきた。名前の読みが兄と同じで嬉しいらしい。もつとも、その兄はまぎわらしいものと思っているが。

蒼島 姫花（そうじま ひめか）男

竜輝の弟で、姫花の双子の弟である。容姿や性格は姉と一緒にあります。そのため今回のことにはかなり嬉しい模様。過去に、竜輝の初めてを奪おうとしたこともあつたので、竜輝からは苦手意識を持たれています。が、本人はあまり気にしていない模様。むしろ、自分に意識が向けられることがうれしいようだ。うん、病院行け。

黒鷹（くろたか）男

竜輝の親友の一人。暇なときがあればよく竜輝のここにくる。そして、よく竜輝にからかわれる。独身だが、本人は気にしていな模様。最近体が鈍ってきたので家や闘技場などの場所で鍛えている真つ集中。そのため、今回のこととはまだ知らない。

蒼島 幻（そうじま げん）男

今回の出来事を引き起こした張本人でもあり、竜輝たちの父親でもある。子供たちのことを溺愛している。そのため、姫花と竜姫が竜輝のどこに入居することや結婚することすら認めている。そのせいで、竜輝からは少し嫌われているが、本人はいたつて気にしていない。少しは気に入る。なお、子供の名前を決めたのは彼であり、『兄弟で同じ字が入った方がいい』と考えていた。そのため、3人の名前には他の兄弟に使われている字が一緒に入っている。その結果、竜輝と竜姫のよう同じ読みになってしまった。

蒼島 蒼馬（あつじま そうま）女

一見男っぽい名前をしているが、れっきとした女性であり、幻の妻である。今回の夫の行動には賛成しているようで、竜姫と姫花には頑張つてほしいと心から応援している。うん、この両親ダメだ。何とかする前にもう手遅れだ。ちなみに、夫と同様、子供たちを溺愛しており、特に竜輝と出会うと激しいスキンシップを試みるほど。そのため、竜輝からは苦手意識を持たれています。竜輝、がんばれ。

急展開にもせひがある（漫畫も）

書き方を少し変えてみました。

## 急展開にも迷ひがある

「……………」

「せつときからいため息してぱつかだけじ向かあつたの?..」

「もしかして、お兄ちやんをこじめるやつがこるとか? だとしたら、私がそいつを今すぐにでも消してくるよ」

「ちひりさん、僕もね」

「こや、決してそんなことではなし。とにかく、こへりなんでも消すのはまづいだら」

「こじめでなこな向なの? 私には想像もつかないんだけど

「僕もお姉ちやんと同意見

「……………まあ。つべづべ自覚がなこつてのは恐れっこものだと想つよ」

「へ、自覚？誰が？何を？」

「……………」  
「ああ。はああああ」

「……………」  
「ああ。はああああ」

「いつせひ話をしていれば少しは氣づいてくれそうなのなんだけ  
どな。

「いつも、気づいたとこもねとなじへしてこる」とができないせ  
も、言えないけどな。

「」  
「」

「黒鷹？ああ、あのお兄ちゃんにこつも近寄つてくる変質者のこと  
ね。でも、大丈夫だよお兄ちゃん。あんなのがいなくとも私が代わ  
りにいるから安心して」

「もちろん僕も一緒に龍輝お兄ちゃん」

「つこに黒鷹の存在が変質者になってしまったか……………」

確か前回は俺に近寄つてくる仮初の友人だったな。

まあこれでもいくらかはましか。もつとひどくなると存在がないようになれるしな。

「まあ、そんなことは別にいいか。それにいたとしても状況はあまり変わらないよつ気がするしな

「じゃあ、もしいたとしたらいざつするつもりだったの?」

「もう少しで身代りにする

「何の?」

「竜姫と姫花に襲われた時に

「え? 襲われた時に?」

「おい、そこ。なんで驚いてんだ。どこに驚く要素があつたんだ。  
そして、なぜそこで驚く

「りゅ、竜輝つてもしかしてマジだったりするの? もじやつだつたら私……」

「うふ、ちょっと待とうか。俺にはどうしてそんな答えが出てきたのかよくわからないうんだが。なので、誰か説明してくれ」

「だつて、わつき『襲われた時に』って言つてたよね。ヒリヒリヒリ返しを察したつもりか。だとしたらひとつ言わせてもらおう。180度違うわ! そんなことを俺が思つていたら大間違いだよコンチクシロー!」

「まず、その思考回路が俺には理解できないよ! あれか、気持ちの裏返しを察したつもりか。だとしたらひとつ言わせてもらおう。180度違うわ! そんなことを俺が思つていたら大間違いだよコンチクシロー!」

「…………うん、ううだよね。こくらなんでもお兄ちゃんがそんなことと思つわけないよね。馬鹿だね私。そんなこと、考えて、本当に、馬鹿、だねつ、」

「お、お姉ちゃん泣かないでよ。お姉ちゃんが泣いたら僕もつらくなつてしまふから、お願いだから泣かないでよ。お願いだから泣かないでよ、おねがい」

そう言つて、姫花も泣き出した。

え？あれ？これって俺が悪いの？俺そんなにひどいこと言つた？

「竜姫義姉さん泣かないでください。姫花義兄さんも連れて泣かないでください」

「うん、『めんね紅花ちゃん。』にんなんじや私義姉として失格だよね。義妹に慰められているよつじやお兄ちゃんと一緒になるなんて夢のまた夢だよね」

「もう卑屈にならないでください！それにお一人が悪いとはだれも言つてないじゃないですか！」

あれ? なんだろう、嫌な予感がする。

そう思つていたら紅花がこっちは振り向いた。

「竜輝！一突つ立てる暇があつたら2人に謝つてよ！元はと言えば

竜輝が悪いんだからやー。」

「ああ、やつぱりやつなるのね。だいだいは予想できていたけど流石にいつも的中してしまつとあまりいい気持ちもしないものだな。

できれば外れて欲しかつたな。その方が何かといいし。

「とりあえず少し待とうか。何で俺が悪いことになつているのか詳しく聞きたいんだが」

「自分で言つておいて悪びれもないなんて本当に竜輝つて最低だね。見損なつたよー。」

「あの紅花さん?人の話を聞いていますか?」

「……………わかつたよ。そつちがその氣なら私にも考え方がある

そつちや紅花は部屋を出て行つた。

部屋に残つたのは、まだ少し泣いている竜姫と姫花、何がどうなつているのかわからず茫然としている俺の3人だけだった。

竜花は友達の家に遊びに行っているため家にはいない。

ほんと何でこいつなつたんだろうな。確か俺が『襲ってほしい』という気持ちはないと言った時からこいつなつたんだよな。

そうなるとますますわからん。何故そんなことで泣き出したのか。

まあ別にいいか。竜姫達がこんな風になるのは今回が初めてではないしな。

そんなことを考えていたら、紅花が部屋に帰ってきた。大きな荷物をその手に持つて。

……………ものすごく嫌な予感しかないんだが。

「竜輝が素直に謝る気がないなら私は実家に帰るー。」

「うん、とりあえず落ち着け。お前が行つたら竜花はビックなるのかわかつて言つているのか？」

「せうやつて私を引き止めようとしても無駄だよ。それと竜花も一緒に連れて行くから問題ないよ」

「いやいやいや、そんなんで俺が納得できるわけないだろ。第一、竜花はこのことを知らないだろ」

「さつき竜花に事情を話したら『うん、わかった!』ってあっさりと納得してくれたよ」

「神は死んだ!…といつか、もはや神は死んだってレベルじゃねーよこれ!…存在が消されたレベルだよ!…」

まさか実の娘にすら見捨てられるとは思わなかつたよ!…え、何?みんなして俺のことをいじめたいの?

俺そんなに悪いことした!…?

「と言つわけで、竜輝がちゃんと2人に謝らない限り私はこの家に帰るつもりはないから」

そつぱつと紅花は部屋を出ていき、玄関に向かつて行つた。

「……………も、ひ、何、が、な、

流石に！」まで来ると「冗談とか言える雰囲気じやないな。

仕方ない。」これは潔く謝るとするか。

「竜姫、姫花。その、すま「ごめん、言い忘れたことがいくつかあつた」

謝ろうとした途中に紅花が戻ってきた。

感かするんだが

というか、さつきから嫌な予感しかなくて悲しそう。良い予感がしてもいい気がするんだが。

「ただ謝るだけではなく、ちゃんと心の底から謝罪するよ！」に。それができたら今度は2人のことを認めてあげること。念のために言っておくけど、2人の好意のことを見つけていたからくれぐれも勘違いしないように。そして認めてあげたらちゃんと返事をあげること。できればいいものでお願いね。まあ、流石にそれは竜輝が考え

ことだから私は強要しないけど。それじゃあ、今度こそ私は実家に帰るから。あ、たまに顔ぐらいは出してもいいよ。じゃあね」

ピュシャツ

! ! ! !

これは流石に予想できなかつた。流石は紅花と言つたところだらうか。

つて、重要なのはそんなところじゃない！！

つ、つまり、前の生活に戻るには竜姫と姫花にただ謝るだけではなく、2人の好意を認めた上で、返事を出せってのか！？

『それなら返事を出すときにやつぱり好きにはなれないって言えばよくね?』と大抵の者はそう思うだろう。

しかし、そんなことをしても無意味だ。何故なら、その返事はもう昔に出しているからだ。それも、好意をちゃんと認めた上で。

だが結果は現在の状況を見ればわかるだろう。そう、つまりこの現状を開けるには2人のことを好きだと言わなければならぬ。

いや、言うだけでダメだ。紅花もそのことはわかっているはずだ。だから、あえて言わなかつたのだろう。ありがたくはないし感謝の気持ちもないけどな。

はっきり言つてしまえば、俺は2人のことを好きにならなければいけない。それが前の生活に戻るための唯一の方法だ。他の方法は恐らくないだろう。

きり言つていいか？これなんて詰みゲー？

何で『襲つてほしい』と言う気持ちがないと否定しただけでこうなつたんだ? 考えても全然答えが出ないんだけど。

そして、一つ言つていいいだろうか。



「Help  
me 黑鷹！」



そのころの黒鷹

「いや～久しぶりにいい汗かいたな～。やっぱ運動は大切だな！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1018y/>

---

蒼島一家の物語

2011年11月15日11時06分発行